
八月のバレンタイン

koyak

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八月のバレンタイン

【Nコード】

N6024V

【作者名】

koyak

【あらすじ】

暦は八月。

市内の気温が観測開始以来の最高を記録した日。

僕は季節外れの贈り物を託された。

勘違いと成り行き任せで紡ぐ恋愛もどき小説です。

貴女は南半球の人ですか？（前書き）

かなり頭の悪い小説です。

裏社会や政治経済の闇に切りこんだりもしませんし

この世の真理に迫ったりもしなければ

ジャンルを恋愛に設定しているくせに男女とは何ぞやなことにも全力でスルーです。

そんな軽い軽いお話ですが、どうかお付き合いいただけたらと思います。

とある少年が思いつきり季節外れのブツを手渡されるところから、物語は始まります。

女の子が好きな女の子が出てきますが、それがメインでもなければデニープなものにもならない予定なので、あえて「ガールズラブ」タグは付けずに投稿しています。

貴女は南半球の人ですか？

「こ、これ、受け取って下さい！！」

校舎の端にある人気のない階段の踊り場。

目の前の顔を真っ赤にした少女が差し出すのは手の平サイズよりは少し大きめな一個の箱。

その箱は彼女の放つ雰囲気によくあつた可愛らしいラッピングに包まれており、微かに甘くて苦い匂いがした。

何だか、バレンタインぽい。と思った。

この箱からは、一年に一度、世の男どもを勝ち組と負け組に容赦なく斬り分けてくれる、あの残酷なイベントの匂いがする。それも義理なんて舐めたもんじゃない。ド本命の匂いだ。

「ばい」と思ったのには理由がある。

今日は二月十四日などではない。八月なのだ。夏真っ盛り。貴女は南半球の人ですか？

いや、南半球でも時期は一緒か。

などと心の中でツツコミを入れることによって少しでも冷静になろうと試みる。しかし駄目だった。

身体が火照る。特に頬が熱い。目の前がチカチカして頭の中が真っ白だ。運動したわけでもないのに呼吸がどんどん早くなっていく。自分の心臓がどくんどくんって脈打つ音まで聞こえてくる気がする。気がつくと僕は、人の限界に挑戦する勢いで背筋を伸ばし、彼女からそれを受け取ろうとしていた。

暦は八月。

市内の気温が観測開始以来の最高を記録した日。

ちよつと季節外れだけど、僕は母親や親戚以外の女性から生まれ
て初めてのチヨコを、

「そして葉月先輩に渡して下さい!!」

もらえなかった。

「……は？」

「だ、だから！ このチヨコを！ 貴方の隣の席の！ 葉月先輩に
！ 渡して下さいって、言ってるんです!!」

「……」

そのフェイントはどうかと思う。

狙ってやっているのだとしたら、この子は悪魔だ。いや、狙って
いなくても悪魔だ。

一周してどうにか冷静さを取り戻すことに成功した僕は、心の中
で血の涙を流しつつ二つほど疑問に思ったことについて、彼女に尋
ねてみた。

「つーか、何で八月にチヨコ？」

「そ、それは！ 恥ずかしくて渡そうかどうか迷っているうちに時
間が勝手に過ぎちゃったんです……」

諦めてもう半年待てよ。いや、その前に製造年月日は半年前かよ。
これ、人間が食べても大丈夫なのか？

喉元まで這い出てきたいいくつもの言葉をグツとこらえる。そう、
これは大したことじゃない。問題はもう一つの方だ。

僕が通っている高校では、教室内の座席は必ず列を男女交互に並
べることになっている。つまり、僕の隣の席、彼女が「葉月先輩」

と呼ぶ人物は、何というか、その、女子なのだ。

最近では女の子同士でチョコを渡し合う「友チョコ」なるものが流行ったりしているらしいけれど、この子の様子は明らかにそれとは違う。

本人を前にしているわけでもないのに未だに紅く染まり続けている頬。少し潤んだ瞳。堅く結ばれた口元。

彼女いない歴〓年齢な僕でも想像がつく。この表情は、きっと。

ツツこみたいことは山ほどある。

けれど、気を抜くとそんなことはどうでもよくなるくらいに、その必死な様子の彼女は、綺麗だった。

容姿が優れているとか、僕の好みのタイプだからそう思うとか、そんなんじゃない。彼女そのものを、綺麗だと思った。

「わかったよ。必ず、渡す」

僕は彼女の想いが詰まったその箱を受け取った。受け取って、しまった。

暦は八月。

市内の気温が観測開始以来の最高を記録した日。

僕の”喜劇”は始まった。

貴女は南半球の人ですか？（後書き）

初めて投稿時の「種別」欄で「連載小説」を選びました（汗）

3話×6カ月＝全18話くらいになる……予定です。

自己満足でしかないかもしれませんが、完結目指して頑張ります。

次話もどうぞ宜しくお願い致します。

それは転がる石のように（前書き）

後輩の子から季節外れのバレンタインチョコをクラスメートである葉月に渡すよう頼まれてしまった主人公。どう渡すか考えがまとまらないまま彼は教室へと戻ってきます。

それは転がる石のように

「……匂っわね。主に貴方から」

教室に戻って席に着いた途端、唐突に話しかけられた。

今日は随分と「匂い」というキーワードにご縁がある日だ。夏だからかな。

声の主は葉月涼花^{はつきりょうか}。右隣の席の女子。

セミロングの髪。男前の領域に片足突っ込みそうなほどに凛々しい目元。そしていつも不機嫌にも見えるし無表情にも見える表情をしている。

僕が通っている高校は「予備校に通わずに現役合格」を目標としているそこそこの進学校で、今日は理系学部志望者向けの夏期講習の日だ。真面目な受験生に夏休みなんてないのである。

文系の奴らや既に受験を諦めている奴、推薦が確実な奴らは来ていないので教室にいる人数は通常の半分以上。周囲の席もスラスカ話しかけられているのは僕で間違いないだろう。

「臭うって、まさか隣の席まで漂うほど汗くさい!？」

夏だし仕方がないとはいえ、高校生男子だって女子から臭いとか言われればそれなりにへこむ。

「そんなことをこの男だらけの教室で気にしていたらキリがないわ。師走君、私が言っているのはそうじゃなくて」

犯人はお前だ!　と言わんばかりに僕を指さして、彼女は断言する。

「チヨコの匂いよ」

「……!」

なんてこった。渡す段取りもろくに練っていない状態で言い当てられてしまった。

確かに僕はそれを持っている。あの子から、如月節奈きつらぎ せつなという後輩から預かったブツを。

「嫌がらせね」

「へ？」

「この私が無類のチョコ好きと知っていてこれ見よがしにそんな匂いまき散らしているんだわ」

そうだったのか。初めて聞く情報だ。

「嗜好品の持ち込みは校則違反。先生にバラされなくなったら、大人しく一個よこしなさい」

そんな校則あったか？

鋭い目つきでこちらを見つめる葉月。彼女は人と話するとき真っ直ぐに相手の目を見て話す。お年頃な一男子としては色々と、やりづらい。

降参。こういう時は小細工抜ききのノーガード戦法に限る。

「わかったよ。ギブアップ。んじゃ……ほい」

鞆から男としては何やら手に持っているのが恥ずかしくなる可愛らしい包装に包まれたあの箱を取り出して、素直に渡すことにした。よし、ミッション完了。やってみれば意外と簡単なことだったな。

「え？ い、いや、一個でいいわよ。何も箱ごとくれなくても」

「遠慮するなよ。元々葉月にあげるために持ってきたものなんだ」

「……」

あれ？固まってる？

「お、おゝい、葉月さん？」

「プレゼントって……こと？ きよ……今日が私の誕生日って、よく知ってたわね……」

そうだったのか。こりゃまた初めて聞く情報だ。

いや、そんなことは脇に置いておくとして、何だこの微妙な空気。よく考えてみたらこのシチュエーション、まるで僕が葉月に誕生日プレゼントを渡したみたいじゃないか？

いかん。これじゃ僕は只のキモい奴になってしまふ。

ちゃんと後輩の子から預かったものだってことを伝えておかなければ。

「実はこれ、」

「あ、ありがとう……。ねえ、ここで開けてみてもいい？」

こちらが何か言うよりも先に問いかけられてしまった！

「え？ え、え〜と、うん。OK」

ヘタレな自分を取りあえず呪う。まずい。タイミングを逸した。ギクシャク且つ丁寧に、というある意味器用な手つきで葉月は包装を外し、箱を開ける。そしてそのまま、ピキリともう一度固まってしまった。

箱の中は、やはりチョコだった。そしてそのチョコは、まるで「湯煎が終わったので、これから形を整えて冷やして固める予定です何か？」と問いかけてきそうな勢いでドロツドロに溶けていた。ああ、だからあんなに匂いがしていたのか。

暦は八月。

市内の気温が観測開始以来の最高を記録した日。

うん、まあ、保冷剤も添えずに持ち歩いていたら、当然そうなりますよね。こぼれて外にはみ出なかっただけでも幸運でしたよね。はい。

こりゃ顔に向かって投げ返されても文句は言えないかも、などと覚悟を決めていると、彼女は無言のまま人差し指でチョコをすくい、ペロリと舐めた。うお、何かエロい。

ちよっとドキリとしてしまったことを自覚するよりも前に、彼女

の顔が青白く染まった。

「こ、これ手作りなのかな？ と、とって……も、おいしい……よ？」

いや、そんな今にも吐血しそうな顔色で言われても。

「ちょ、無理するな。何かごめん！ それ、回収するよ！」

「ダメ！」

思いつ切り払いのけられてしまった。痛い。

「あ、ごめん……！ その、食べ物粗末にしちゃいけない、というのがうちの家訓なの。全力でいただくわ」

「そ、そうなんだ」

全力つて、食べるときに使う言葉なのだろうか。

「ところで、さっき何か言いかけてなかった？」

「い、いや、何も言っていない。何でもないよ」

とつさにそう答えてしまった。だって仕方がないだろう？

季節はずれで、ドロドロに溶けていて、元々なのか傷んでいたのかわからないけど恐らく劇薬レベルの不味いチョコ。

そんなものを、如月が作ったなんて教えてしまったら、葉月の如月への印象はきつと悪くなってしまう。

そしたら、如月は、悲しむ。きつと。

アイツのそんな顔を、僕は見たくない。

……決めた。ちゃんとした素晴らしい、いかにも愛情こもってま
すっというチョコを、僕が作るう。

勿論今度こそ、如月からのプレゼントということにして。

腹を据えた僕は宣言する。

「次は、ちゃんとしたものを持ってくる！」

「え……！？」

「ちよつと時間がかかるかもしれないけど、必ず持ってくる。その時に、葉月に伝えたいことがあるんだ」

如月のこと。あの子がどれだけ葉月のことを慕っているかっ
と。

「え、その、ありがとう……た、楽しみにしてる。」

珍しく目をそらして俯く葉月。

教室にいた他の連中の好奇の視線が全身にザクザクと突き刺さ
た。

この時、既に僕は如月のことで周りが見えない状態になって
いたのかもしれない。トチ狂っていたとすら言える。

後になって思えば、見た目や味がいくら悪かろうが、ちゃんとあ
のチヨコが如月からのものであることを最初から葉月に伝えるべき
だったのだ。それが葉月と如月の両方への礼儀というものだろう。
その後どうなるかなんて彼女ら二人の問題だったはずなんだ。

もしもタイムマシンが手に入ったら。

僕はまず、この日の自分に真空飛び膝蹴りをくらわせに行く計画を
立てようと思う。

学生の本分はXXです（前書き）

色々と誤解を生みつつも如月から預かったブツをクラスメートの葉月に渡すミッションをどうにかこなした主人公ですが……。

学生の本分はXXです

「先輩先輩！ 渡してくれましたか！？」

講習が終わり、ちよいと小用を足しに廊下を歩いていると、待ちかねたように如月がひょっこりと現れて話しかけてきた。

「お、おう」

結構話せるようになっていたはずなのに、一度意識すると途端に話しくくなるのは何故だろう？

接点なんてあんまりない（何せ携帯の番号も知らない！）し、こうやってやり取りする機会も限られているのに。

僕と如月は幼馴染みでも家がお隣どうしでも親同士が仲良しでも義理の兄妹でも前世で契りを交わしているわけでもない。

強いて言うなら最も近いのは”部活仲間”。

ただし、”帰宅部”の、だけど。

帰宅部というのは基本的には周囲から暇人だと思われる（実際にその通りなことも多い）。

そのためか、帰りのホームルームや廊下、げた箱などで教師などと遭遇したときにちよくちよく雑用を頼まれてしまうことがある。

図太い奴やしたたかな奴、バイトや家庭の事情などで本当に忙しい奴などは上手くこれらのトラップを回避するのだが、僕の場合は要領があまりいい方ではないのもあって逆に生徒会連中などにも顔を覚えられるくらいの常連と化していた。さすがに受験生様となった今では雑用が降ってくることは少なくなったけど。

如月も似たようなパターンだったらしく、何度か手伝いで顔を合わせているうちにちよっとずつ話すようになって現在に至っている。

「おい、せんぱい？ 何遠い目をしてブツブツ言ってるんですか？」

「うおっと、すまんすまん。……安心してくれ。如月から預かったものは確かに葉月に渡してきた。」

嘘は言っていない。嘘は。

「先輩」

突然ガシッと顔を両手で捕まれた。

「何か、目が泳いでいませんか？」

「そ、そんなことはないぞ？」

近い近い近い！

「ふ〜ん、まあいいです」

解放された。今日は顔を洗わずに過ごすことをコッソリ決意してみる。

ちよつとだけ、自分が駄目な人間になった気がした。

「ところで、あのチヨコっていつ作ったんだ？」

「そりゃ勿論昨日ですよ！ 学校のある日は殆ど毎日作り直してきました」

……つまり、日が経って痛んでいたとかじゃなく、純粹に不味かつたってことか。如月節奈、恐ろしい子。

「ちなみにこれまでの渡せなかったチヨコは全てお父さんが食べてくれました！」

娘をもつて、その、大変ですね。

「それで一昨日、お父さんから『お前の愛は重すぎる』って泣きつかれちゃったんです。そのせいでお母さんに台所を使わせてもらえなくなっちゃって。だからあのチヨコが今年最後……。また渡せずに持ち帰るなんてことがないように師走先輩にお願いしちやいました！ てへ」

『てへ』じゃないよ！ っただけ父親を追いつめたんだよ！？ でも可愛いな！くそう！！

「はあ……。如月が葉月に本気だったことはわかったよ。それでも、

聞いていいか？」

「はい、何でしょう？」

「あいつのどんなところがいいわけ？ 分かっていると思うが、あいつは真正銘の女だぞ。同性だぞ。実は最近流行の”男の娘”、なんてオチもないんだぞ」

確かめたことはないけど。

「いや、むしろ男なんてありえませんし。あんな汗くさくて無駄にでかくて邪魔くさい肉の塊、同じ人間で認めるのも嫌なくらいです」
サラリと言い切りやがった。目の前にいる僕も、一応性別は男なだけで。

「それに引き替え葉月先輩は綺麗です！ 格好いいです！」デキる女”って感じがします！ 三年生の成績上位者にお名前が載っているのを何度か見かけましたし、それにそれに！見たことがありますか？ 葉月先輩が陸上の大会で跳ぶ姿！ 天使！ マジ天使ですよ！！ もう観るたびに惚れ直します！」

そういえば、三年の高体連が終わって既に引退しているけど、葉月は陸上部で走り高跳びの選手をやっていた。結局届かなかったが全国を狙えるレベルだったらしい、という話を聞いたことがある。よくチェックしてるなこの子は。ストーカーにだけはならないでくれよ？

「ああ、思い出すな。そう、あれは去年の四月、わたしがまだ初々しい新入生だった頃……」

語り続ける如月。どうも妙なスイッチを入れてしまったらしい。

折角だから夢見るように語る、その横顔に見とれてしまおうか。

それとも葉月に醜く嫉妬してしまおうか。

どっちにしようかな。前者の方が、なんぼか前向きかな！

「先輩、そんなじつと見ないで下さい。怖いです」

「葉月に関しては鬱陶しいくらいに乙女なのに、僕に対しては結構、鬼だよな？ 如月……」

これで自分がマゾだったら、どれだけ救われることだろうか。

立ちはだかる障害の高さに、軽く目眩を感じた。

このバーは僕が跳び越えるには少々高すぎるのかもしれない。

夜。草木も眠る丑三つ刻……にはまだちょっと早い時間。

とてもとても真面目な受験生である僕は帰宅してからも勉強に勤しんでいた。

やることにした科目は数学Bの複素数。高校二年で習う内容だけどなかなか侮れない。曲線を書いたり補助線を引いたりしつつ、問題集を解いていく。……はずだったのだけど、気づくとノートには「自分」「如月」「葉月」「orz、などという落書きでいっぱいになっていた。

「葉月、か……」

”ライバル？”と、落書きに注釈を追加してみる。

「駄目だ、全然集中できねえ」

ぐでつとだらけていると、不意に携帯の呼び出し音になった。

画面に表示されている名前は「ながつき長月かねよし兼好」。

珍しいな。こんな時間に。

「はい、もしもし」

『おう。遅くに悪いな。受験勉強はかどってるか？ ……なんて前置きは置いといて、だ。聞いたぜ？』

「聞いたって、何をさ？」

『とぼけんなって。お前が葉月に告白したって話だよ！』

……へ？

（第2章『長月』に続く）

学生の本分はXXです（後書き）

ここまでご覧いただき、有難うございます。

八月の話はひとまずここまで。

次は夏休み明け、九月の話になります。

引き続きどうかお付き合いいただけたらと思います。

同盟成立（前書き）

如月から預かったチヨコを葉月へと渡すことにどうにか成功した主人公。

しかし、その様子を級友たちから誤解されてしまったらしく、友人の長月兼好からそのことについて電話がかかってくることに。

同盟成立

夏休みが明けて九月。

僕は長月兼好^{ながつきかねよし}と向かい合って昼飯をかきこんでいた。

葉月は学食にでも行ったのか、隣の席にその姿はない。

「いや、お前が葉月に告白したって噂を夏期講習に参加していた連中から聞いたときは驚いたぜ。『あの歩が！？』ってな」

「こつちが驚いたよ。どこをどう誤解したらそんな話になるんだか。みんな余程受験でストレスがたまっているんだな」

兼好から電話で噂のことを聞かされたあの日、告白なんてした事実はなく、自分と葉月は級友以上の関係はないことを説明した。兼好が納得する頃には夜明けも間近になっていた。

その後、噂をしている奴らに事実を説明し、もう一方の当事者である葉月が無関心を貫いていたこともあって話はデマとしてようやく落ち着きを見せていた。

「それで、お前のお気に入りな節奈ちゃん、だっけ？」

「知り合いでもないのに下の名前にちゃん付けとかすんなよ」

「まあいいじゃん。その子とはどんな感じなのよ？」

「どうもこうも、何もないよ」

「おいおいおい、卒業まであと半年しかないってのに随分のんきだな。余裕かますのは受験勉強だけにしとけよ？」

「ほっとけ」

そっちの方も、余裕なんてない。

「見込みは？」

「ない。向こうはそもそも男自体に興味なし！　なんだぞ。一体どうしろっていうんだよ」

「むしろ普通に好きな男がいる、よりもチャンスはあるだろ。考え

てもみる。女同士での恋愛がそう簡単に成立すると思うか？」

「まあ、両方ともそういう趣味がなければ、まず無理だろうな」

「だろ？　そして葉月はノンケだ。そこは同じ部活だった俺が保証するよ」

兼好も葉月と同じ陸上部に所属していた。種目は主に1500m走。

部活の方は県大会まで進んで予選敗退に終わっているが、校内のマラソン大会では昨年、三年生をおさえて校内一位をとっている。

今年度はどういうわけかマラソン大会が廃止になってしまい、長月は「バスケ部の陰謀に違いない」と嘆いている。以上、余談。

「ということは、だ。節奈ちゃんの恋は十中八九、実らない。

狙いはそのときだよ。現実でも漫画とかでも失恋して傷心な女の子の愚痴や悩みを聞いているうちに新たな恋が芽生える　なんてのはよくある話だ。恋愛ジャンキーな姉貴と妹がいる俺が言うんだから間違いない！」

説得力があるんだかないんだか。

つまり僕にとってのチャンスは好きな相手の失敗を前提に成り立っているってわけだ。

「そんな後ろ向きになってもいいことなんてないぞ。お互いが幸せになれるんならそれが一番じゃねーか」

「ごもつとも。ちよつとはやる気出てきた気がするよ。一応礼は言っておく」

「おいおい、一応、かよ。もつとこう涙と鼻水を垂れ流すくらいに感謝してくれよ」

「はいはい。今度購買で売ってる80円の豆乳でもおこるよ。……ところで、一つ聞きたいんだけど」

「あんだよ？」

「いつになく協力的なのは何でだ？」

そうなのだ。兼好は基本的にはいい奴なのだけど物事への好き嫌いが結構ハッキリしていて、

興味があることにはとことん食いつく一方で興味がないことにはとことん面倒くさがる。

「俺とお前の仲じゃないか。相談にのるくらい、当然だろ？」

「僕とお前の仲だからわかるんだよ。兼好はそんなキャラじゃない」「ぐ、嫌な返し方しやがつて。まあお察しの通りだ。俺にもそれなりに思惑がある」

突然、兼好は腕を僕の首にまわし、顔を近づけてひそひそ声で続きを語る。

残暑も厳しいというのに暑苦しい奴である。

「実はな、俺、狙ってたわ。その、葉月のこと」

ああ、わざわざ電話で噂の真相を確認してきたのはそれか。

「納得したか？」

「ああ。ということは僕たちは敵同士ではなく共に手を取り合える戦友同士といえそうだな」

「兄弟、俺も同じことを考えていたぜ」

「……」

「……」

ガッ！

これまた唐突に交わされる男同士の握手。

「同盟成立」

「だな」

そんなむさ苦しい様子にニヤニヤした視線と冷めた視線が注がれていることを、そのときの僕たちは知る由もなかった。

侯爵はお嘆きのようです（前書き）

男たちの昼飯トークは続く。
会議は踊る、されど進まず。

侯爵はお嘆きのようです

「同盟成立」

「だな」

とは言ってみたものの。

「ただ、僕は如月に積極的にいくつもりはないよ」

「おいおいおい、何をいきなり萎えること言ってるんだよこのヘタレ！　んじゃお前はどうしたいんだ？」

「とりあえずは、如月の応援、かな」

「やりたいだけやらせてみるってか？　ある意味ひでえ気もするがまあいいか。だけどそれじゃ俺のライバルを応援するってことにならないか？」

「そこはほら、両方を応援するってことで」

「このコウモリめ。かち合う場合は？」

「そのときは如月優先」

「男らしいんだか情けないんだかわからねえことを言いやがる」

「葉月はノンケなんだろう？　大丈夫だって」

「お前はホント嫌な打ち返し方をするな」

「いえいえ、お代官様ほどでは」

などとアホなやり取りをしていると、そこに割り込む声が。

「ノンケとか何とか何やら香ばしい話の匂いがするねえ」

そう言いながら僕と兼好の首に両腕をまわしてきたのは神無月だった。フルネームは神無月時雨^{かんづきしぐれ}。友人なのかは議論の余地があるけれど、何かとご縁がある奴だ。

少女漫画から出てきたかのような、同性としてはムカつ腹がたつてくるレベルで整いなすったお顔の上に、普段以上にニヤニヤした表情をのせている。

あきれ顔で兼好が指摘する。

「男に絡みつかれても嬉しくねーっつの。任期満了間近とはいえ、生徒会長様がこんな所で油売っていてもいいのかよ？」

確かに来月には学校祭、再来月には生徒会選挙だ。生徒会は大忙しだろう。

「大丈夫大丈夫。みんな優秀だから僕一人が抜けても平気さ。葉月さんのことが好きな女の子がいるんだって？ いいね。実に好みの話だ。詳しく聞かせておくれよ」

出来ればこいつにこの話はあまり聞かせたくない。

「まあまあ、そんな顔すんなって師走。こいつは非常に腹立たしいが、彼女持ちだ。勝ち組様だ。何か参考になる話が聞けるかもしれない。神無月、実はだな……」

「ほほう、如月さんという女の子が葉月さんのことを……。そして、チヨコのリベンジ……。いいね。いいよ！ 燃えてくるね！！ そういうことなら、この僕にも及ばずながら協力できることがありそうだな」

「この変態め。何だよ？ 協力できそうなことって」

「ふふん、それはだね……」

「ここにいましたか。探しましたよ」

ほんわかした柔らかな声で更にもう一人が乱入してきた。サラリとした黒髪長髪に眼鏡、縁側で昼寝する猫のような目にしやなりしやなりと音がしそうな歩きでこちらに近づいてくる。微笑んでいるのに妙な威圧感。神無月の顔がひきつっている。

「ひ、柊さん、ここ、三年生の教室なんだけど？」

「それがどうかしましたか？ まだまだ仕事は山積みですよ。さあ、行きましょう」

普通、上級生の教室に入る場合、大抵はそれなりに緊張の一つや

二つはするものなんじゃないかと思うけど、彼女は二年生とは思えない堂々たる足取りで有無を言わせず神無月を引きずりながら去っていった。

「が、頑張れよ。彼女と仲良くな……」

「うむ。いいなあ。ああやって尻に敷かれるのもなかなか懂れるものがあるぜ」

兼好、お前そんな趣味が……。

「そんな可哀想な奴を見る目で見ないでくれ……。それで、何の話をしていたんだっけか？」

「兼好も如月もどちらも応援するよって話」

「そうだった。じゃあ俺の方はお前が如月さんを応援するのを応援すりゃいいってことになるのか？ ややこしいな。まあいいか。んで、この同盟による最初の作戦は何にするよ？」

「いきなりそんなこと言われても思いつくわけじゃないか。そっちこそ何かやろうとしていることがあるから話をもちかけてきたんじゃないの？」

「……」

「おーい、恋愛ジャンキーなお姉さんと妹さんがいて頼りになる長月さん？」

「会議は踊る。されど進まず……か」

名言だとは思いつけど今は世界史の復習時間ではない。

「まあ、非モテ男二人が頼寄せあってもこんなもんだよね。この件は来週までの宿題だな。宿題！」

早くもグダグダになりそうな予感がぶんぶん漂う。

「はあ、了解。宿題ってことで」

「宿題なんて出てた？」

いつの間にか戻ってきていた葉月が自分の席に座りながら話に尋ねてくる。まさかこの話を聞かれた？

「いやいやいや、今日宿題なんて出てないよな。ってコイツに確認

してただけだよ。そんじゃ！」

そう言いながらそそくさと自席へ戻る兼好。僕は心の中で先ほど賜った「ヘタレ」の称号を打ち返した。

ふと視界に入った時計を見ると時刻は昼休み終了五分前。次の授業の準備をしようとかばんの中から教科書を取り出す。ちらちらと僕のその様子を見ていた葉月が少し間を置いて切り出してきた。

「師走君って、確か化学が得意だったよね？」

「ああ、それだけは割と自信あるな」

葉月はどうも化学を苦手としているらしい。それでも平均よりは上をいつているらしいのだけど。

「もしよかったらだけど、今度の日曜、勉強会とかどうかな。その、何人か集めて」

兼好が何も聞こえていない風を装いながらこちらに向けてこっそりと親指を立てているのが見えた。

「そりやもう大歓迎だけど、突然どうした？」

「別に。ただ師走君と長月君が宿題がどうこうって話しているのを聞いて、たまには受験生どうし教えあってみるのも合理的だし気分転換にもなるかなって思っただけ」

「そりやごもつとも。んじゃさ、二年生も交ぜていいかな？ 一、二年生で習うところはあっちの方が習って日経っていない分、覚えているところもあるだろうし」

ちよつと苦しいだろうか。しかし、葉月はにっこり微笑んでこう答えた。

「いいんじゃない？ 二年生というと……例えば如月さんとか？」

昼休みの終了を告げる予鈴が鳴る。

何でだろう？ 今日妙に女子の笑顔が恐ろしく思える日だ。

にじみでるもの

そこは確かにタダで使えて人でごったがえしていない、落ち着いた素敵な場所だった。

「これが格差社会ってやつか……」

「何か、カッコいいです……」

「うちの家族のセンスもこんな感じだったら良かったのに……」

隣で兼好、如月、葉月がそれぞれの感想を呟いている。

全員僕と同様、ここを訪ねるのは初めてらしい。

日曜日。僕たちは勉強会をするために神無月の家へ集合していた。駅前にある貸自習室は有料であり、図書館は勉強目的の利用が禁止されており、学校の自習室は開放開始直後から三年生で埋め尽くされていて非常に窮屈なためだ。

神無月家はサイズだけでいえば、平均的な戸建より少し大きい程度。しかし、壁やドアの地味ながらも重厚な質感、小さな美術館といった方がよさそうなデザイン。そして素人目にも手間暇かかっているのが伝わってくる庭の手入れっぷり。大きさ、広さ以外のところで相当お金がかかっていそうな家だった。

「霜月さんはもう来ているらしい。お邪魔しようぜ」

兼好がそう言ってインターホンのボタンを押す。

『開いているよ。入ってくれ』

すぐに神無月の返事がきた。四人揃って玄関に入る。

「……」

まだギクシャクしているみたいだな。如月と葉月。

それは今日の昼、神無月の家に一緒に行こうと近くの公園で待ち合わせていたときのこと。

残暑厳しい中、僕と兼好は集合時間の30分ほど前に到着し、「早く来すぎ！ お前はどれだけ楽しみにしてるんだ！？」と指差し合ったり

「『ごめん、待った？』って言うてくれるといいな。そしたら『今来たところだよ』って返す憧れのリアクションができるのに！」などと雑談をして時間をつぶしていた。

集合時間5分前。

「こんにちは〜！ 誘っていただいてありがとうございます！ 暑いですね〜」

如月登場。意外と時間にはきっちりしているらしい。明るい色合いのブラウスにショートパンツ。ちょっと子供っぽい気もするけどある意味似合っている。

「あら、長月君あたり遅れてくるかと思ったけど、もうみんな集まっているのね」

そしてほぼ同時に反対方向から葉月の姿が。こちらはカットソーと細身のジーパン、細いシルバーフレームのメガネ。色気のない服装だけど葉月が着ると異様にハマっていて、何だか「フットワークが軽くて仕事がデキる女！」っぽい雰囲気醸しだしている。

「二人ともあれだな、イメージ通りって感じの服装だな」

「何かご不満？」

「いやいやいや、似合ってるってことっすよ！」

「微妙に下っ端な言葉遣いになってるぞ兼好」

そういえば勉強会の話が出たとき、葉月の口から如月の名前が出ていた。ということは、

「葉月と如月って面識は……あるんだよな？」

「ええ、あるわ」

「はい、あります」

普通にYESと返されただけなのに妙な緊張感がはしる。

何だ？ てつきり如月は大好きな”葉月先輩”に会えて大喜びすると思つたのに。むしろそのために声をかけたのに。実際、この勉強会の件で声をかけたときは嬉しそうにしていた。

如月はどんな顔をすればいいかわからない様子で曖昧な笑みを浮かべ、葉月の方は何か苦いものを飲み込んでしまったような微妙な表情を浮かべている。

絞り出すような声で、先に言葉を発したのは葉月だった。

「久しぶり……。足の方はもう大丈夫？」

「お久しぶりです。いやだな」葉月先輩、それ随分前の話じゃないですか。この通り、元気ですよ？」

そう言いながらクルリとまわってみせる如月。

足？ 何の話だろう。それに二人はどういう関係なんだっけ？

如月からは葉月を絶賛する話だけでどういう仲なのかはよく考えてみると聞いたことがない、ということに今更ながら気づく。

ちよつと聞きづらい雰囲気なんだけど、気になる。

そのとき、兼好が僕が考えていたことと全く同じことを口にした。「足？ 何の話？ そういえば葉月と如月さんってどういう関係なんだっけ？」

僕は自分の中の兼好の評価を「ヘタレ」から「勇者」に上書きした。

「長月君には関係ないことよ」

「長月先輩には関係ありません」

息はぴつたり。泣くな、兼好。

それから目的地到着までの間、ずっと如月と葉月の間にこれといった会話は無い。僕や兼好とは普通に話しているのだけ。

玄関にあがると神無月が霜月さんと一緒に僕たちを出迎えた。

「やあ、みんなようこそ。僕の部屋はこっちだよ。ちなみに親は留守だから。気兼ねなく勉強に励もうじゃないか」

部屋にあがり、テーブルを囲んでそれぞれ腰をおろす。

「どうぞ」

「うお、こりやどうも」

慣れた様子で霜月さんはアイスコーヒーをいれてくれた。

何故そこまで勝手知ったる風なのか、深くは考えないようにする。

霜月^{しむづき}柊^{ひいらぎ}。二年生。そして生徒会会計。

お嬢様風なワンピースを身にまとうその柔らかな姿からは想像がでないが、一部の生徒たちからは「鬼の副長」（会計なのに！）という異名で恐れられている、もとい、親しまれている。

部屋を見渡すと目につくのは全体的にモノトーン調な色合いの壁、机、ベッド。片隅にケースに入れて立てかけてあるのはバイオリンか何かだろうか。別サイドにでんと置かれている茶色い木目調の本棚が、相対的に鮮やかに浮き上がって見える。

本棚にはその人の趣味が強くにじみ出るといふ。

神無月の本棚は「綺麗なもの」と「アレなもの」の両極端に分かれていた。

「綺麗なもの」としては世界各地の伝統的なお菓子や茶に関する本、世界遺産や風光明媚な場所の写真集、あとは椎名誠や米原万里のエッセイ、司馬遼太郎の「街道を行く」シリーズなど。

「アレなもの」としては……アレ過ぎて僕の脳は理解を拒絶する。人の趣味をとにかく言うつもりはないけど、こういうのって普通は人が来るときはどこかに隠しておくものなんじゃないだろうか。

「師走君、何を見ているんだい？ ああ、『俺の矛とお前の盾』か。名作だよ。ただ、男である君にはこちらの『お姉様と呼ばないで』の方がオススメかな」

タイトルでジャンルは薄々想像がつく。”アレ”とはつまり、そういうことだ。

「勘弁してくれ……」

どうせならエロ本でもお勧めして下さい。ただし女性陣がいない所で。

ふと見ると如月は『お姉様と呼ばないで』を手にとって目を輝かせていた。あ、やっぱりそっち系の本か。

「ほらほらほら、師走君も神無月君も如月もストップストップ！

ここには勉強をしに集まったのよ。趣味話に花を咲かせるのは後！」

葉月が場の軌道を修正する。

彼女には僕に彼らと同じ趣味はないことを熱く説く必要があるよ
うだ。

大好きな何かのために

勉強会は思いの他順調に進んでいく。二年生の二人も霜月さんは全教科において、如月も得意科目に関しては三年生組と遜色ない、どころか逆に教える側にたつ場面すらあった。

彼女の得意教科は英語。

「先輩、ここは五文型に照らしあわせると」

「あ、なるほど！　じゃあこの選択肢は誤りだな」

「長月先輩、この関係代名詞はここにかかるんじゃないですか？」

「た、確かにそうすりや意味がつながるな。うわ、本当に正解したし！？」

どちらが上級生かわからない。

「意外と言うと悪いかもしれないけど、凄いな如月」

「そ、そんな大したことないですよー！」

「如月さんは、近所に”先生”がいるのよね？」

霜月さんが訳知り顔で話をふる。

「や、やめてよー！　あんなちよつと語学ができるだけの変態。」

先生”なんて呼ぶ気になれないよー」

む、誰の話だろう？。

ちよつと聞いてみようとしたそのとき、葉月がある男の”スイッチ”を押してしまった。

センター試験の古典の予想問題を解きながら彼女がうめく。

「源氏物語のこの歌ってどういう意味だったかしら……」

その瞬間、キュピーン！　という音が聞こえた気がした。兼好が眼光鋭くもの凄い勢いで立ち上がる。

「ふっふっふ！　任せろ、葉月。この歌はだな、**の部分が暗に藤壺のことを指していて　が　なんだ！　だから紫の上がXX

でそれが第XX帖の展開の伏線になって云々……」

「あ、ありがとう。長月君。よくわかったわ……」

「ちなみにこの時の光は兄の外戚から圧力をかけられていて……」

兼好の語りは延々と続く。この男の古典好き、特に源氏物語好きは異常なレベル。こうなるとこいつを止めるのはなかなか難しい。

男とは、時には好きな何かのために暴走しちやったりもする業の深い生き物なのである。この場合、それが源氏物語のためなのか葉月のためなのかは判定が難しいけれど。

しかし、神無月がそんな暴走兼好を一撃で黙らせる一言を投げかけた。

「目を覚ますんだ、長月君。いや、”あさきゆめみ先生”。葉月さんが思いつ切りひいているよ」

「ぶほあ!!」

エア吐血。我に返った兼好が青ざめた顔で神無月に問いかける。

「な、なぜその名前を……!？」

さてね、と欧米人のように肩をすくめる神無月。

どういうことだろう？ 葉月と二人で首を傾げていると、その疑問に答えるかのように如月が叫んだ。

「”あさきゆめみ先生”って、もしかして『紫たんは俺の嫁』の”

あさきゆめみ先生”ですか!？」

「ごふう!!」

エア吐血二回目。そろそろエア輸血が必要だろうか？

「あ、あの！ ファンです!! サイン下さい!!」

感激の眼差しで古文教科書の裏表紙を差し出す如月。

霜月さんまで同じ眼差しで同じことをやっている。

「神無月、これ、どういうこと?」

「それはだね……」

どうやら兼好は源氏物語が好き過ぎるあまり”あさきゆめみ”と

いうペンネームでブログに二次創作をアップしているらしい。ライ
トノベル風にアレンジされた解釈と文章がうけて、某巨大掲示板で
も専用スレが立つほど話題になっているとのこと。如月と霜月さん
も実はその愛読者なのだそう。

後輩女子二人から尊敬の眼差しで見つめられている兼好。僕たち
は今、”奇跡”を目の当たりにしているのではないだろうか。

しかし、肝心の葉月はというと、我関せずで黙々と続きの問題を
解いている。

「ままならないもんだな……」

「全くだわ。はあ」

何故か葉月に同意されてしまった。

「……ふむ、もう四時か。いや、時間が経つのは早いね」

神無月が首をこきこきいわせながら呟く。

もうそんな時間か。かなり集中できていたらしい。意外なほど捗
った。捗ってしまった。

何というか、こう、勉強が手につかなくなるようなドキドキイベ
ントの一つや二つは起きてくれてもよかったのに、と思わなくもな
い。六人も寄り集まった状態でそんなことを期待しても無理がある
のはわかっているけど。

「ちよつと一息入れようか」

そう言つて神無月は部屋を出ていった。

「何だ便所か？」

「長月先輩、下品です……」

「ふふ、多分、すぐに戻ってくると思いますよ」

そんなやり取りをしているうちに、神無月が戻ってきた。

「おまたせ。朝にちよつと作ってみたんだ。よかったら食べてみて
くれないかな？」

シルバートレイの上に人数分のケーキ。作つたと言われなければ、

少々値段のはる洋菓子店で買ってきたと勘違いしてしまいそうなほど綺麗に形が整ったチョコレートケーキだ。深みのある匂いが部屋に漂う。

「……」

葉月サン、そのケーキに注ぐ熱い視線の100分の1でいいから、兼好に分けてあげて下さい。

「いい匂い。油断させておいて実は化学兵器レベルの不味さ、なんてオチがつかないことを祈るわ」

「こいつは美味そうだな」。ありがたくいただくぜ」

「もう食べていいですか？ いいですよね？」

「どうぞ、召し上がってください」

いただきます、とまずは一口。

「……！！」

僕たちから音が消える。響くのは時を刻む時計の針、そしてフオークと食器が触れあう音のみ。

誰もが一言も発することなく黙々とケーキを口に運び続ける。

完食。

兼好も如月も葉月も魂が抜けかかった顔をしている。恐らく僕も似たような表情を浮かべているのだろう。

「感想、できれば聞かせてくれるかな？」

時は動き出す。

「う、美味え〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！！」

「お代わりは、お代わりはあるの？」

「わたしも！ わたしもお代わり欲しいです！！」

「おおお落ち着けよ！　まずはだな、この後味をじっくり楽しんでだな！」

「そう言ってもらえてホッとしているよ。実はもう一個焼いてあるんだ。よかつたらそちらも食べていってけると嬉しい」

「……いただきます！」「……」

後に兼好はこう語る。あの時、四人の心は一つになっていた、と。

至福の休憩時間。しかもメルアドを交換する流れになって如月のアドレスもゲットできてしまった。きっかけを作ってくれた兼好の調子の良さには感謝せざるをえない。

ケーキの余韻を楽しみつつ勉強をもうひとふんばり進めているうちに午後六時過ぎ。そろそろお開きとすることになった。

片づけをしてそれぞれ家路につく。霜月さんも帰るらしい。よかった。親不在の家に神無月と二人で一晩、と言われたら色々想像して眠れなくなるところだった。

「家までお送りしますよ？　お嬢様方」

冗談めかして一応言ってみる。これ、紳士のたしなみ。

「べ、別にいいわよ。そんなに遠くもないし」

「私もです。今日はお疲れさまでした」

「右に同じです。わたしはコチラの道なので、それでは」

勉強会、終了。結局如月は葉月とあまり話せていなかった。今回如月に声をかけたのは、もしかしたら余計なお世話だったのだろうか。

そんな不安にかられていたとき、携帯がブルブルと震えだした。

メールを受信。差出人は、『如月節奈』。

『今日は葉月先輩と会うことができて本当に本当に嬉しかったです。』

誘ってくれてありがとうございます、先輩!」

「うおっしゃあ! やる気出てきたーっ!」

「うおあ!? き、急にどうしたよ?」

ケーキを口にしたときから考えていたこと。行動に移していいものか、少し迷っていたけど、今ので決心がついた。

「兼好、僕は忘れ物を思い出した! 悪いけど、先に帰っていき
れ」

「忘れ物を取りに行くのにそこまで気合い入ってる奴を俺は初めて
みたぞ……。まあよくわからんが、頑張れ」

兼好と別れ、来た道を走って戻る。やがて僕たちを見送ったとき
のまま玄関前で待ちかまえ、不適に笑みを浮かべている神無月の姿
が見えてきた。

ち、お見通しってわけかよ。

「お帰り。前に言った『僕にも手伝えることがありそうだ』の意味、
わかってもらえたかな?」

「ああ」

この日、僕は神無月に”弟子入り”した。

(次章『神無月』に続く)

大好きな何かのために（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございます。

勉強会后編です。

次話から10月のお話になります。

人を見た目だけで判断しちゃいけません

床も壁もコンクリートをむき出しにした窓のない地下室。飛び散った鮮血の中心に横たわるのは、右脇から左肩にかけて逆袈裟に斬り裂かれた……僕の姿。活動の停止を運命づけられた心臓がそれでも命をつなぐと弱々しくもがき続ける。

走馬燈のように、僕はこれまでのことを思い出していた。

・ ・ ・

「うーん、赤点はギリギリ回避って感じかな」

味見をした神無月が辛目の判定を下す。

勉強会から三週間後。暦は十月となり、僕たちは最後の夏服とお別れをしていた。あれから週二で神無月の家にお邪魔し、チョコ菓子作りを教わっている。

今作ったのは基礎の一つ（らしい）”ガナツシュ”。簡単に言えばチョコと生クリームを混ぜあわせて作るクリームである。

チョコを細かく刻む。生クリームを小鍋に入れて弱火で加熱。沸騰直後に火をとめて刻んだチョコを投入。少しだけ冷ましてから適量の洋酒を加え、全体が白っぽくドロリとなるまでかき混ぜる。

大したことはない作業に見えるかもしれないが各工程のさじ加減がなかなか難しい。

「赤点ギリギリか。師匠は厳しいな」

「いやいや、ついこないだ練習し始めたばかりってことを考えればかなり早い進歩だよ。学校祭の出し物のこともあるし……もう次の

段階に行ってもいいかもね」

「次の段階？」

「うん。師走君。提案なんだけど、ちょっとアルバイトしてみない？ 人手が足りなくて困っている知り合いがいるんだ」

「待て待て待て！ いくらなんでも無理があるだろ！？」

「大丈夫、いきなり製造をやらされることはないから。実際にお店で売られる品々とそれが作られていく様子を間近で目にすることは、きつと君の役に立つはずさ」

「むむ、それなら……」

こうして僕は死地に足を踏み入れることになる。

・
・
・

視界が光に包まれていく。走馬燈ももうすぐ終わる。僕の人生はもうすぐ終わりを迎えるのだろうか……。

「おいコラ！！ いい加減、帰ってこい！！」

顔ごと吹き飛ばされそうな勢いで頬をはたかれる。

「おぶう！！ ……はっ！ 僕は一体……！？」

「まったくよお、人の目を見るなりアツチの世界にいつちまいやがつて。失礼な奴だぜ」

「あ！ す、すいません。出来れば指を詰めるとかは勘弁していただけると……！」

「……もういい。で、店長、こいつどうしましょうか？」

「ハロウィンも近いし、何よりもチカップの紹介だ。使ってやってもいいだろう。販売とか材料運びからやってもらおうか」

「は、はい。ありがとうございます！ よろしく願います」

面接、合格。

僕はめでたく洋菓子屋「コロポックル」でアルバイトをすることになった。なつてしまった。受験生なのに……。

「あいつの仲間ってんなら親の判子とかは別にいらん。この書類を適当に埋めて明日もってこい」

「は、はい」

この人は店長のキムンさん。190cmほどもある上背に筋肉というよりは鎧と表現したくなる体つき。そのシルエットは人ではなく”熊”を連想させる。

「次に俺の顔を見て意識とばしやがったら、そこの冷凍庫で氷漬けにすんぞ。覚えとけ」

「は、はい……」

こちらの物騒なことを仰っている人は従業員のチーフでウパシさん。店長と違って細身で、背も男にしては低め。しかし目があつただけで先ほどの僕のように、思わず自分の死をリアルにイメージしてしまうほどの凶悪な目つきの持ち主だ。全体から受ける印象は”人斬り”。今にも「今宵の虎鉄は血に飢えておる」とか言い出しそうで凄く怖い。

この店のことをよく知らない人はキムンさんとかウパシさんとか一体どこの国の人だよ？ と疑問に思うかもしれない。ここでは店員のことは北海道の先住民族、アイヌの言葉で呼ぶルールになっているのだ。

後で調べてみたところでは”キムン”は山、”ウパシ”は雪、そして神無月はここでは”チカップ”と呼ばれており、鳥を意味するらしいということがわかった。

「よろしく頼むぞ、明日からお前は”オタピ”だ」

上半身と下半身がおさらばしそうな強さで背中を叩かれる。

「げほ！……は、はい！ お世話になりますー！！」

ちなみに”オタピ”は砂粒という意味。スケールが異様に小さいネーミングにちよつと悲しくなる。

コロポックルを出てから神無月と待ち合わせている近くのコンビニへと向かった。

「やあ、お疲れ。面接はどうだった？」

「お陰様で合格したよ。それよりもあの店員さんたちは何者なんだ？ 一瞬や ザの事務所とか軍隊の詰め所に迷い込んだかと思つたぞー！？」

「いやいやいや、あの人たちはちよつと顔つきが怖いだけの善良な一般人だよ。もっとも店長はパレスチナのガザ地区で洋菓子作りの修行を積むつていう、少しか変わった経歴の持ち主なんだけどね」
絶対別の経験も積んでるだろ！？ 何故そんな命がいくつあつても足りないそうなところに行つたのか。尋ねるのは怖いのでこの疑問は胸の中にしまっておくことにする。

「はあ……」

果たして僕は、本当にここでやっていけるのだろうか。

24時間戦えますか？

渦巻き文様と棘文様を組み合わせた、パット見では幾何学的に整然と張り巡らされた蔦のような印象を受ける不思議な装飾で彩られた看板。

それが僕のバイト先、洋菓子店「コロポックル」の目印である。
語の下の人コロポックルという店名にちなんでか、この店のケーキやクッキーなどはどれもナッツなどの木の実があしらわれている。また、一個の大きさは非常に小さく、その分お値段はリーズナブル、というのが特徴だ。

「お待たせしました。ギモーヴ・トリュフとマンデリンのセットになります」

コロポックルにはちょっとしたイトインがあり、女性客を中心に（というか、強面な店員に恐れをなしてか、男性客は皆無……）割と人気だったりする。

先輩の教えを思い出しつつ、お客さんに注文のメニューをそつとお届けする。

僕の教育係であるアペフチ火さんはゲームに出てくる炎の魔神の如く、赤茶けた逆立つ髪の毛（地毛）と赤銅色の肌を恥ずかしげに制服と頭巾で隠しながらオネエ言葉でこう語っていた。

「いいこと、このお店では無駄に元気のいい接客は求められていないの。あなたは森の妖精コロポックルの一人。お客様は妖精の里の近くに迷い込んだ人間さん。人間さんが寝ている間にこっそりと贈り物を置いていくの。ゆっくりお休み中の人間さんの邪魔をしてはダメよ。優雅に、且つ、静かに、厳かに。礼儀とおもてなしを欠かさず、よ」

何だか無茶な要求な気もするけど自分なりに解釈して仕事をこなす。忙しくないときはチラ見した製造の様子を頭の中で反芻する。クッキー、マカロン、ギモーヴ、バトン・マレシヨ、ブラウニー、ケーキ。チョコレートを使うもの限定でも呆れるほど沢山の種類があるものらしい。受験には全く役にたたなそうだけど、それらは新鮮な刺激だった。

「おう、こいつを窓際の3番席まで運んでくれ」

ウタピさんからちよつと温めたチョコレートマフィンとルイボスティーのセット二組を受け取る。

「お待たせしました。こちら、ご注文の……って、もしかして、葉月!？」

「し、師走君……」

自分のバイト先に知り合いが現れるのは何とも形容しがたい恥ずかしさを感じるものである。

よくよく考えてみたら、葉月の好みを考えればこの店に彼女が姿を見せても何ら不思議はないことに思い当たる。

「なにになに? 涼花の知り合い?」

「まあね。タダのクラスメート」

向かいに座る子の問いにそっけなく答える葉月。

悲しいことに”タダ”の部分に思いっきりアクセントを置かれてしまった。

「ふん……」

葉月の顔を僕の顔を交互に見比べていたその子は不意にニヤリと笑ったと思うと唐突に言い放った。

「もしかして、涼花が言ってもごおっ!」

訂正。言い放とうとした。

彼女が最後まで言い切る前に、大きく切り取ったマフィンをその

子の口にねじ込む葉月。

「た・だ・の・ク・ラ・ス・メ・イ・ト。O・K・？」

もぐもぐと咀嚼しながら、その子は神妙に頷いた。

「葉月サン、怖いッス……結局そちらの方は今何て言おうとしたも
ごおっ！」

口の中に特大のカタマリがぶちこまれる。美味い。けど、苦しい。
どなたか水を！

「女に根ほり葉ほり質問する野暮な男はモテないわよ？ O・K・
？」

もぐもぐと咀嚼しつつ、僕も神妙に頷いた。

「……お客様のくつろぎの時間を邪魔するなって、いっつも教えて
いるわよね？ その頭の中身は豆腐でできているのかしら？ お
客様、大変失礼致しました」

炎の魔神、もといアペプチさんは僕のえり首をむんずと掴み、有
無を言わせぬ力で店の中へと引きずっていった。

「ちょ、ちよつと！？ 師走君！？」

それではお客様、ごゆっくり。

なんてこともあったりしつつ、このバイトにも大分慣れてきた。

本来の目的を忘れそうな勢いで楽しみ始めている自分がいる。

本来の目的。

「菓子作りを覚えてとびっきりのチョコを如月のために、葉月にプ
レゼントする……」

……あれ？ 僕、かなり頭悪い、というか意味不明なことをしよ
うとしてる？ ま、まあ、いいか。とりあえず、今気にするべきは
……。

「学校祭だろ。いよいよ明後日からか」

デカイ弁当箱を綺麗に空にした兼好が僕の回想に答えるようにして呟いた。お前は僕の心でも読んでいるのか！？

午前の授業が終わり、今は昼。学校祭準備のためということで授業は午前までとなっている。

「全く、”執事喫茶”なんて案があそこまで女子の支持を集めるとは思わなかったよ」

「まあメイド喫茶とかやることになって女装させられるよりはマシだろ？　楽しもうぜ」

いや、普通に男は男の恰好、女は女の恰好をするという選択肢はないのか？

僕たちのクラスは学校祭で”執事喫茶”をやることになっていた。女子も含めて執事の格好をして接客する。神無月や葉月なんかはさぞかし似合うことだろう。兼好ももしかしたら体育会系＋執事という異色の組み合わせで意外な人気を集めるかもしれない。

飲み物、食べ物の方かというと、火は使えないので家庭科室で沸かしたお湯を魔法瓶に保存し、それを使って紅茶、コーヒーを入れる。後は予め作っておいたクッキーなどのお菓子を提供することになっている。足りなくなれば家庭科室のオーブンなどを使わせてもらう予定だ。

「んで、今日の買い出しは誰だっけ？」

「僕と、兼好と、葉月と、神無月だな」

「神無月の奴、買い出しまでやんのか。店づくりとか接客指導も神無月が中心になってやってるよな。働き過ぎじゃね？」

そう。しかも生徒会のこともあるし、コロポックルの人たちの話ではどうやって時間を作っているのか色々な店で助っ人のようなことをして渡り歩いているらしい。更には9月以来、数回開かれてい

る勉強会にもきっちり参加していたりする。

神無月、お前は一体何人いるんだ？

"仲間"って、そついうもんだろ？

「いやゝ大分涼しく、というか寒くなってきたよな。早く春夏にならね〜かな〜」

道すがら、兼好が呟く。この男は夏は冬に恋をし、冬は夏に恋をする。

けれど三年生である今はもしかすると別の意味も含んでいるのかもしれない。

学校祭前々日の午後、僕たちは材料の買い出しに向かっていた。輸入食品店なんかで揃えられればカッコいいのかもしれないけど、予算が限られているので安いわりに質の良い商品を揃えていることで一部に知られているスーパーで調達する。

純粉砂糖、グラニュー糖、アーモンドパウダー、卵などなど。あとはコーヒー、紅茶の葉。必要なものをドサッドサツと買いたしていく。

「よし、こんなもんだよな？ 神無月？」

振り返ると、ついさっきまで一緒に歩いていたはずの神無月の姿が見えなかった。

視線を下におとす。

神無月は、倒れていた。

「おい、どうした!？」

「神無月君!？」

気づいた葉月と兼好が駆け寄ってくる。

こんな時はどうする？

どこか別の場所に動かす？

下手に動かすとまずい？

何か応急処置が必要？

その前にまずは救急車？

「救急車を呼びました。ここは店の中なので別の場所にそっと運びましょう」

そう言っ て姿を現したのは霜月さんだった。

「霜月さん…… どうしてここに？ 偶然じゃ、ないよね？」

「朝、かなり顔色が悪いのを見ていたので、ちよつとストーカーっぽいとは思いましたが、心配で後をつけていました」

愛って凄いい、ということにしておこう。お陰で助かったことにはかわりない。

「神無月は何か持病でも抱えているのか？」

「いいえ。私を知る限りではそういうのはありません」

やがて救急車のサイレンが聞こえてきた。

神無月が倒れた原因。それは疲労だった。

聞けばナポレオンも真つ青な生活が続いていたという。

幸いすぐに目を覚ましたが、大事をとって明日一日様子をみようということになった。学校祭当日も無理はさせられないだろう。

クラスの出し物は殆ど神無月が仕切っていたので、明日の最終的

な準備と学校祭当日をどうするかという話し合いが急遽行われた。店づくりは8割がた終わっており、機器を借りる手続きも済んでいる。接客もある程度練習を積んでいるし当日着る執事服もほぼ揃っている。

問題は、当日出す菓子を誰が作るかという点だ。材料を一通り揃えてしまった今となつては店で買い揃えようとすると完全に予算オーバー。

この件について、病院で目を覚ました神無月はとんでもないことを言い残していた。

「師走君に、おまかせするよ」

師走？ 何で師走？ その話を聞いたクラス内がざわつく。はい、そうですね。僕、そういうキャラじゃないッスよね。自分でも向いていないとは思うけど、第三者たちからそういう反応をされると密かにダメージが大きい。

「大丈夫よ」

葉月の発言に、場が静まる。

「師走君は、あの『コロポックル』でバイトをしているわ」

「コロポックル!？」

「言われてみれば見かけたことがあるかも」

女子たちを中心に僕を見る目が微妙にかわった気がする。再びざわめく教室内。

「そんじやさ、とりあえず試作品を作ってもらおうぜ?」

何故か兼好が仕切り出す。

「どう? 師走君。できそうかな?」

葉月からのパス。人からこんな風にボールがまわってきたのは初めてだ。

正直、無理があるだろと思う。

でも、ここでやらなかったら、この先も今日のことを後悔しながら過ごすことになるだろう。

そして何よりも、この一ヶ月の成果を自分でも試してみたい、とちよつとだけ思った。

「わかった。やるよ」

家庭科室へ移動し試作に取りかかる。

神無月の弟子になって更に洋菓子店でバイトしているといても、そんなに複雑なものは作れない。メニユーのうち、僕にとって現時点で一番自信のあるもの……マカロンを作ってみることにした。

卵白を必要量計り取り、グラニュー糖を少しずつ入れながらかき混ぜる。

アーモンドパウダーとココアパウダー、粉砂糖を混ぜてふるい、かき混ぜた卵白にサクリと入れて混ぜる。

更にゴムべらで押しつけるようにして適当な柔らかさになるまで混ぜて生地を作る。

これを絞り袋に入れてオープンシートを敷いた天板に絞り出して乾燥させる。

最後にオーブンで焼き上げ、自然に冷えるのを待って完成。

クリームやジャムをはさんでいざ試食。

一応、今の自分の全てを出せたと思う………という大げさだろうか？

さて、クラスの皆の評価は？ 固唾をのんで見守る。

「……普通だな」

誰かが言った。

フツーだね。意外とふつう。

フツウ普通ふつう。普通の大合唱。

僕は心の中でガツクリとひざをついた。

自分で食べてみた分には悪くはないつもりだったのだけど。

「だけど、これなら私たちも作れそうな気がする」

誰かが言った。

「うん。神無月君が作ると上手すぎて手伝うのも気がひけちゃうけど、これならやれそう！」

「味が普通なのは……」おもてなし”でカバーってことでいいんじゃない？

「んじゃ接客チームは頑張らねーとな」

あれ？ 何か話がまとまっていつてる？

「そういうわけで、だ」

兼好がイラっとくるほどいい笑顔で僕の肩をポンとたたく。どういうわけだよ。

「作る方はそつち側に任せたぜ！」

翌日は各準備の詰め、レシピの確認、リハーサルなどで瞬く間に過ぎていった。

そして学校祭当日。

"仲間"って、そういつもんだろ？（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございます！

10月の話は次で終わる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6024v/>

八月のバレンタイン

2011年10月10日03時25分発行